



豊 中 市 教 育 セ ン タ ー

〒560-0033 豊中市蛍池中町 3-2-1-600

T E L 0 6 - 6 8 4 4 - 5 2 9 0

F A X 0 6 - 6 8 4 0 - 8 1 2 7

平成 23 年 (2011 年) 3 月 23 日 第 48 号

「人つながり・・・」



3月11日、三陸沖を震源地とする国内観測史上最大級の東北地方太平洋沖地震が発生し、甚大な被害が発生しました。私は、エレベーター内で、揺れを感じ、同乗の方たちと「結構大きな地震でしたね。」「とじこめられるかと思いました。」と声を掛け合っていました。その後、TVの映像に釘付けになりました。時間が経つにつれ、地震、津波の甚大な被害状況が明らか

になり、亡くなられた方、行方不明の方、被災された方の数がどんどんふくらんでいきます。新聞や映像による、被災された方の「数」としての報道から、一人ひとりの方の顔の見える、生活が見える報道へと変わっていく中で、あらためて、胸がしめつけられてしまいます。

豊中市としても、地震直後に消防緊急援助隊として、6隊23人の消防職員を派遣し、13日には交代要員として22人が出発、岩手県で救助活動に従事していただいています。被災地では、被災された極限状況の方々が、ルールをつくり、共助の精神で互いを慮って生活をされていると報道されています。悲しみを胸に沈めて、倒壊家屋から調味料を探し、被災者の食事作りに貢献している中学生、家族とはぐれて、家族を探す活動をしている9歳の男の子、避難所の高校で、世話役を買って出ている高校生、被災した自分にもできることを見つけ、行動している子どもたちがいます。避難所リーダーの方は、「今は、がんばっているけれど、避難生活が長引くと、みんなイライラしているから、けんかが出てくるだろう」とも語っておられます。そのような緊迫した状況に、原子力発電所への不安も追いつちをかけています。離れたところにいる私たちができることは何か、私自身が、日本全体が問われています。被災された方々が求めておられることを判断し、行動に移すこと。心情に寄り添うこと。不安をあおることなく冷静に行動すること。おとなが何をすべきか、子どもたちに見せることで、着実に子どもたちは学び、できること、やるべきことを見出していくと信じています。量販店等では、トイレトペーパーや紙おむつ、カップ麺や乾電池等が売り切れていると聞きます。被災地に送付されるためであってほしいと願いつつ、一番困っている方々に、せめてもの物資が最優先して届けられることを祈ります。被災された方々の喪失感は今から増大します。どんなケアが必要か考えていきたいと思ひます。

今まさに、子どもだけでなくおとなも含めて、豊中市教育振興計画にかかげている「人つながり、未来を切り拓く力」が求められているのだと再認識しています。

(鈴木)

『科学の街とよなか』推進月間

サイエンスツアー（1/7）を行いました。

大阪大学総合学術博物館 「マチカネワニものがたり」

JT生命誌研究館 「生命の歴史について」

小中学生・保護者 27 人の参加。完全なワニの化石としては大変貴重なマチカネワニを前にして、ワニが生育していた 40 万年前の環境や化石からわかることなどを学びました。



野鳥観察会（1/22）は服部緑地公園にて行いました。

小学生と保護者 18 人の参加があり、暖かい日差しの中、渡り鳥の名前や見分け方、生態について学習しました。また、公園内を散策しながら、鳥のさえずりに耳を澄まし、自然豊かな豊中の環境を楽しみました。

サイエンスフェスティバル（1/29）では小中高の科学部・大学・研究所など 20 団体が科学ブースを開きました。

534 人の来場者があり、それぞれのブースで楽しく科学を体験しました。またスペシャルイベントとしてサイエンスショーを開催しました。



（大学生スタッフによる実験）



夢工房の吉田先生を講師に「見えない空気と遊ぼう」と題して、身の回りにある空気を使った楽しい実験を客席の子どもたちとともに行いました。客席からは驚きの声や大きな歓声がわきあがり楽しい時間を過ごしました。

移動科学実験教室(3/5)・親子理科講座(3/12)を行いました。

移動科学実験教室では、庄内公民館前で集合して大阪大学の研究室を訪問しました。小中学生 17 名の参加があり、研究のようすや大学の実験室を使った体験実験を行いました。

親子理科講座は、小学生・保護者 23 名の参加があり、音が出ているものは振動していることを学習し、音階を計算で求めながら、一弦ギターを製作しました。

巡回相談

豊中市支援教育事業

巡回相談は各校園の管理職及び教職員を対象(相談者)とし、指導上、支援が必要な子どもについての悩みや不安、指導のあり方について、巡回相談員の派遣を通してそれぞれの課題に応じた教育相談を行う事業です。

巡回相談員は、特別支援教育士スーパーバイザー、臨床心理士、言語聴覚士、作業療法士、支援学校教員など様々な方がいます。相談内容やご希望などから巡回相談員を決定し、派遣いたします。

相談の進め方

子どもの困り感への気づき
校内委員会などで検討
巡回相談申込み(管理職より)
巡回相談決定
相談票の作成
・相談内容の整理

巡回相談当日

・把握(巡回相談員が子どもを観察)
・協議(専門の立場から、意見交換等)
指導の改善と取組み
報告票の作成
・成果と次の課題の整理
・情報の共有、引継
・今後の指導に活用

今年度はのべ51校園へ実施しました。次年度も年度初めに案内予定です。校内委員会などで検討の上、管理職より申込みください。

なお、年度途中でも各校園の状況を考慮し、申込を受付けますのでご連絡ください。

平成23年度(2011年度) 研修等が変わります!!

次年度は研修を見直し、教職員のみなさまが少しでも参加しやすいような工夫や内容の充実を図っていきます。また、4月に改めてご案内しますので、ご確認ください。

各教科・領域の研修を充実!

新しい教育課程が小学校で全面実施されることに伴い、様々な教科・領域にかかる研修を実施し、充実させていきます。

子どもたちと向き合う時間の確保を!!

先生方が、子どもたちと向き合う時間をつくるため、以下の点で変わります。

研修の一部を夏季休業中に集中させる。

初任者研修25回実施のうち、4回分を2年目に実施する。

サタデーサポート事業終了!!!

毎週土曜日の午前中に、教職員のみなさんの自主的な教材研究の場として、センターを開館してきましたが、利用状況から、この4月より本事業の見直しを図り、土曜開館を休止いたします。

叱ることについて

子どもを育てる上で、正しい価値基準、善悪の判断、幅広い知識と理解、社会規範などを発達段階に即して身につけさせることは大切なことだと考えます。教育活動はその営みともいえます。そこにはきちんと「叱り」、ほめるべきことは「ほめ」、そして「教える」という区別が重要です。子どもは注意されないとそのまま良いと思ってしまうこともありますので、叱ってでも正すことが必要となる場合があります。叱り方次第でしつけや教育の効果が生まれることもあり、逆に子どもの心を傷つけることもあります。叱るばかりでは自尊心が傷つき、萎縮してしまいます。例えば、それらを2：3：5という2つ叱って3つほめ5つ教える教育指導を考えることもできます。

「叱る」と「怒る」とは違います。思い通りにならない子どもを前にしてイライラしたり、腹が立つことがあると思います。子どもの好ましくない行動や間違った行動に対して、感情をむき出して声をかけることは「怒る」にあたります。「怒る」とは一貫性がないので子どもからは感情的と受け止められ、説得力に欠けます。

「叱る」とは非難や攻撃することではなく、より良い方向に変えようとする行為で一貫したものです。子どもを叱るには、まず日頃からコミュニケーションを深めておき、子どもと先生との信頼関係が築かれていることが基礎に必要です。そして、子どもの言葉に耳を傾け、事実を正確に把握した上で、子どもの成長に合わせた言葉で叱ること、集団の場合は、子どもたちの間で不公平な取り扱いをしないことも大切です。下記に叱り方のポイントを数例挙げます。

叱り方のポイント

- ・ 時と場所を考える（効果的なタイミング）
- ・ その行動、行為のみを叱る（過去のことは言わない）
- ・ 人格を傷つけない
- ・ くどくどと言わない

叱った後、子どもが反省し同じことをくり返さなくなったら、叱ったままにはせず、努力し成長したことについて認める言葉かけなどがあるといいですね。

（小山）

